

# 社会的不適応と性役割期待

大井修三<sup>1)</sup>, 今枝未紗<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>岐阜女子大学 <sup>2)</sup>名古屋市

(2017年9月25日受理)

## Social Maladjustment and Sex-role Expectation

<sup>1)</sup>Gifu Women's University <sup>2)</sup>Nagoya City

OHI Shuzo<sup>1)</sup>, IMAEDA Misa<sup>2)</sup>

(Received September 25, 2017)

### Summary

In a stressful society, interpersonal maladjustments occur frequently, and the maladjustments may be caused by an irrelevant coping with stress. There are differences of frequency of maladjustments between the sexes. We suspected that one of causes of the maladjustments were the sex-role expectation (SRE) in the society. But recent studies showed that there was no difference of SRE between the sexes. And the differences of stress coping behaviors (SCB) between the sexes were frequently reported, but the phenomena did not coincide with sex-matched one. On the other hand, the masculinity and femininity linked with SCB in both sexes. Furthermore, in private episode, we feel to be expected a behavior matched with the sex. These make us expect to get the procedure for resolving the problems of social maladjustment by means of determining the SRE in private places.

### 現代社会におけるストレスと問題行動に表れる性差

近年、自殺や引きこもりといったメンタルヘル스에密接に関連した社会的問題が、大きく取り上げられてきている。警察庁生活安全局(2010)は、平成21年中に自殺した人数を約3万3千人と発表し、自殺率は例年と変わらず非常に高い率で推移している。また、東京都(2008)は、都内の引きこもりの状態にある若年者は、推計2万5千人に及ぶと発表した。これらのことから、現代の社会に生きる人々の多くが、社会で生きることの困難さを感じていることが伺える。

このような問題行動の背景には、社会生活を営む上で必然的に生じる対人関係や、仕事のストレスがあると考えられる。人見(2006)は、メンタルヘルスの臨床に携わる経験から、社会的引きこもりやうつ病の増加と、それらと密接に関わる自殺の増加などの社会的病理は、ストレスと強く関わっているとし、現代を「ストレス社会」と表現した。

私たちは、誰もが日常生活を送る中で、多かれ少なかれストレスを感じているし、それらのストレスに、私たちはさまざまな手段で対処をすることによって、心身の健康を維持している。しかし、うまく対処できなくなると、うつ病などの精神疾患に陥ったり、自殺

や引きこもりといった、社会との関係を絶つような行動になると考えられる。したがって、ストレスにうまく対処していくことが、この人見の言う「ストレス社会」の中で、健康に生活するために重要となっている。

興味深いことに、自殺や引きこもりといった社会的問題が報告される時、その問題行動には男女で大きな違いが見てとれることがある。上記で取り上げた自殺については、自殺者の71.5%が男性であることが報告された。また、東京都の引きこもりの調査においても、2/3が男性であるという結果が示された。

このように、統計的数値に性差が表れる一つの要因として、我々が生活する社会に存在する性役割期待が考えられる。福富(2006)は、自殺などの問題行動は経済状況の推移と連動しており、男性は一家の大黒柱として経済的支柱であらねばならない。したがって、弱音を吐いてはいけないという思い込みから、誰にも相談せず、行き詰った結果として自殺に至るとした。そこには性別に応じた役割や期待に違いがあり、それらがストレスに対する対処行動を制限して、最終的に自殺や引きこもりといった問題行動につながっていくと考えることができる。

男女平等が叫ばれるようになってから久しくなり、公に性別に依存して役割や期待を語ることがはばかれるように感じる。しかし、現状として深刻な問題を抱えているメンタルヘルスの現場では性別間に差が現れており、表向きのジェンダーフリーでは、社会的問題に現れる性差を説明することができない。

このような社会的不適応に性別で偏りが存在することは、社会的ストレスに対する対処行動に性差があることを意味する。そして、このストレス対処行動の性差を生み出す要因には、我々の社会に潜在的に組み込まれている性役割期待が原因の一つとして考えられ

る。そこで、これまでのストレス対処行動や性役割に関する研究が、これまでに明らかにしてきたことを以下で見ていく。

## ストレス対処行動に性差が生じる原因の検討

### 1. ストレスの定義とストレス理論

日常生活において、よく「ストレス」という言葉が使われる。「ストレスが溜まる」や「ストレス発散に…」という言い回しは、もはや聞きなれた言葉となり、ストレスが私たちの身近にあるものとなっている。それでは、ストレスや本研究で扱うストレスに対する対処行動は、心理学的にどのように捉えられてきたのであろうか。

そもそも、ストレスという概念が最初に心理学の論文の中で用いられたのは、キャノンによってであった(1935;坂部, 1992による)。キャノンは、生体の恒常性と外的環境との影響を議論する中で、生体の恒常性を乱す外的負荷を与えるものをストレス、ストレスによってもたらされる恒常性がかき乱されて生じる生体の緊張状態をストレインという言葉で説明した。

キャノンの説をさらに発展させたのがセリエである(1936;坂部, 1992による)。キャノンは、適応疾患の原因を探る研究の中でストレスと言う言葉を用いたが、セリエは、ストレスを「何らかの要求に対する生体の非特異的な反応」と捉え、普通に生活できている生体で生じている視点を重視した。そして、ストレスは人々の日常経験の一部であり、外科的外傷、情緒的または肉体的労苦、不安、失敗の屈辱、薬物等による中毒、さらに、生活様式の改善を必要とするような予期せざる成功など、極めて多様な問題に直面して生起する。この生体に変化を求める内的・外的要

困をストレスと呼んだ。そして、ストレスがさまざまに異なっても、生体は一定のパターンの生化学的、機能的、構造的変化で、問題に対応することを提唱した。

キャノンやセリエのようにストレスがストレインを引き起こすという考えに大きな転換をもたらしたのが、第二次世界大戦や朝鮮戦争における帰還兵士に見られたさまざまな不適応行動であった。その中でも、戦争中に同じようなストレス状況に直面したときの「個人差」が注目された。すなわち、同じ状況に直面しているのに、どうして不適応行動が生じる人と生じない人があるのか。このような個人差を解明しようとして、心理学的な研究が盛んに行われるようになった（ラザルス & フォルクマン, 1984）。

ラザルスとフォルクマンは、認知的評価（cognitive appraisal）と対処（coping）の概念を導入したストレス・コーピング理論を提唱した。その中でストレスを「個人の資源を超え、心身の健康を脅かすものとして評価される人間と環境とのある特定の関係」と定義した。すなわち、外圧があっても、それを自らに危機をもたらすと評価しないとストレス者とならないという、受け手側の特性の重要性を指摘した。たとえば、同じ状況に対しても、人はそれぞれの反応をする。怒る人、憂鬱になる人、不安や罪の意識を持つ人、何も感じない人など、さまざまである。このように、出来事に対しての捉え方や行動の仕方は、それに直面した人がそれをどのように認知し、評価するかによると主張した。そして、次の3次からなる評価過程を提案した。

一次的評価とは、ある出来事に対して、「私は、今、あるいは将来困るのか、あるいはよくなるのか。それはどんな方法でか」を評価する過程である。これは、その出来事が自分にとって、①無関係か②無害－肯定的か、ま

たは③ストレスフルかの3種類に区別される過程である。二次的評価は、一次的評価において、出来事がストレスフルであると認知されたときに、「そのことについて何ができるか」すなわち対処方法を評価する過程である。つまり、この過程で、その出来事に対してどのような対処方法が可能か、その対処方法で思ったとおりになし遂げられそうか、特定の手段を適用できそうかなどを考慮する。この二次的評価が、主に対処行動に関わる評価過程である。また、一次的評価と二次的評価は分離した過程ではなく、これらは相互に依存し、影響しあっている。そして、三次的評価である再評価において、自分がストレスフルと知覚した出来事に対しての新しい情報や、自身の対処によって得られた情報に基づいて出来事を捕らえ直し、新たにその出来事に対する態度を決めていく。

ラザルスとフォルクマンがストレス理論で提唱したように、ストレスを過程としてとらえると、人が健康な生活を維持・遂行していくためには、ストレスフルであると評価する事象に対して行われる対処行動が、ストレスフルな出来事を克服して、健康な生活を送るために重要な意味を持つことになる。

## 2. ストレス対処行動の定義と種類

ストレス対処行動といっても、具体的に取られる行動はさまざまである（小杉, 2002）。最初にストレス対処行動を2種類に分類したのは、Lazarus & Folkman（1980）であった。一つは、葛藤の原因や自分にとって脅威となる出来事に対して、積極的に取り組んで原因を解決したり、変化させようとする「問題中心の対処」である。これは、先に述べた一次的評価でストレスフルと評価された出来事が、二次的評価で、自分の力でどうにか対処できそうであると判断されたときに行われる

対処行動とされた。二つ目の対処行動は、葛藤の原因になる出来事に対して情動的な苦痛を低減させるためになされるものであり、「情動中心の対処」である。これは、一次的評価でストレスフルと認識された出来事が、二次的評価で自分の力では変えていくことができないと判断されたときに行われる対処行動とされた。

Endler & Parker (1990) は、Lazarus & Folkman が対処行動を測定するために開発した尺度 (The Ways of Coping Questionnaire : 以下、WCQ とする) を用いた多くの研究で、その結果が因子分析されるとより多くの因子が抽出されることに注目した。そして、対処行動をより幅広く捉えるために、「問題中心の対処」と「情動中心の対処」に加えて、自己への没頭や空想にふけるなど、葛藤の原因に直接関わりのないところで行われる行動があることを指摘し、「回避中心の対処」を付け加えた。そして Endler & Parker は、ストレス対処行動は「課題優先対処」、「情動優先対処」、「回避優先対処」の3種類で構成されるとし、これに基づいてストレス対処行動を測定するためのコーピング尺度 CISS (Coping Inventory for Stressful Situation) を構成した。

国内では、田邊・堂野 (1999) が、大学生を対象にストレス対処行動を検討した。その中で、ストレスフルと評価した出来事の脅威が低いにもかかわらず、大学生は「問題中心の対処」ではなく、問題が過ぎ行くのを待つなどの「回避中心の対処」を多く用いることを報告した。これらの事実から考えると、ストレス対処行動を、「問題中心の対処」、「情動中心の対処」、「回避中心の対処」の3種類で捉えることが、ストレス対処行動を適切に把握するために、より有効であると考えられることができる。

## 性役割の定義と変遷—日本に根付いた性役割期待

現在日本に根付いている性役割期待は、明治政府によって進められた脱亜入欧政策に拠るものである。江戸時代における鎖国政策によって、幕末期に欧米諸国との間の国力の違いがとてつもなく大きくなったことを実感した明治政府は、欧米を手本に国力の増強を図った。この時日本政府は、欧米の在り方をそのまま模倣しようとして無批判に取り入れようとし、それは精神文化にも及んだ。当時のヨーロッパでは、男性が女性に勝ることは当然というとらえ方が普通であった (Gould, 1981)。また、脳の大きさは知能の高さを表すと考えられた当時、男性の脳が女性の脳より大きいのは、男性は優秀であるが、女性は生来、弱く、軽はずみで、感情的であり、積極的でなく、依存的で一般的に劣等であるという認識に基づき、それを説明するためと称する科学研究が行われた (Tobach, 1973 ; 本吉・岡本, 1979)。明治政府は西欧諸国に追いつき追い越そうとして欧米文化を取り入れるときに、この男女の捉え方も日本の文化に取り入れ、今の日本社会の性別役割期待の基本となってきたといえる。

しかし、西欧諸国では、19世紀の後半より、産業経済の発展に伴い、女性の能力や職業的能力に関心が高まったこと、また第二次世界大戦中に社会活動への女子の動員が必要となったことにより、女子の能力や利用を考慮する必要が生じた。このような社会的事情により、社会的役割に対する適性の男女の差異ではなく、特性で説明することに関心もたれるようになった (間宮, 1979)。そして、男女それぞれの特性が、どのように形成されていくのかという性差を規定する要因が研究され始めた。やがて、性差は生物学的な男女

の違いだけでなく、社会的、文化的な要因により規定されることが主張され、そのような「性差」は、社会学的に性別に付随してふさわしいとされる「役割」の違いとして取り上げられるようになった(福富, 2006)。

性差を、生物学的性別に生得的に付随した「役割」の違いと捉えると、自分の性別に付随する役割に応じた行動を行わなければいけないように感じる。しかし、井上(1995)は、現にある男女の役割や性格の違いが、性役割概念を導入することで社会や文化によって作られたものであり、それゆえ変更可能であるとする、人間関係における性役割の概念が果たす重要性を指摘した。そうであれば、私たちは、男女に差があることがふさわしくないと考えられる現象に性差があれば、そこには後天的に獲得された性役割が関係していると考えることができるし、それを考慮した支援をしていくことができるはずである。

ストレス対処行動の性差もこれまで生物学的性別に基づいて分析されてきた。しかし、ストレス対処行動も私たちは生得的に行うわけではない。そのような行動も、生物学的性別ではなく、性別に後天的に付随させられた誕生後に経験して習得されてきた社会的役割期待が反映されている行動であると考えることができる。そこで次に、私たちの行動に性差を生み出す要因の一つと考えられる性役割の概念と、心理学研究において用いられてきた性役割の測定法に基づいて得られた結果を概観する。

## 1. 性役割の定義と変遷

日本における研究で、もっとも頻繁に用いられている性役割の概念は柏木(1972)のものである。柏木は、性役割は3つの側面から構成されることを指摘した。一つ目は、「性役割行動」であり、これは現象としてみられ

る行動上の性差である。二つ目は、「性役割観」であり、これは性役割について個人固有の概念である。また三つ目は、「性役割同一性」であり、男らしさ・女らしさの自己評価であるとした。そして、その中で、「性役割行動」とは、行動、性格、態度を含む幅広い概念であると捉え、具体的な行動として表出されるものとした。また、「性役割観」と「性役割同一性」の2つは意識のレベルであるとして、行動とは区別してとらえた。

小倉(1991)は、柏木(1972)の定義の中で、2つ目の「性役割観」が「社会から期待される広義の性役割観とずれることがまれではない」としている点に注目し、そうであれば、「性役割観」は社会から期待される広義の性役割に含まれるものではないとした。また、「性役割同一性」については、何についての「男らしさ」「女らしさ」の自己評価を表わすのかが、明確でないことを指摘した。その上で、性役割とは、柏木のいう社会から求められるパーソナリティ特性を含む「性役割行動」のみを指すと主張した。

心理学辞典(有斐閣)には、性役割とは、「男女の生物学的性別を一つの社会的地位と考えた場合、その地位に付随した社会的役割として存在する性格特性や態度、行動様式など」(土肥, 2007)とされており、多くの側面を持つ概念である。

このように、性役割の分類は研究者によってさまざまであり、性役割という用語は、包括的な概念として、捉えることが望ましいことになる。そうであれば、研究において、「性役割」の用語を用いるときには、どの側面の「性役割」を対象にするのかを、精緻に定義して用いることが求められる。本研究では、それら全ての報告に共通する特性をまとめ、性役割を「性別に付随して社会から期待される性格特性や態度、行動様式」と捉えること

とした。

## 2. 性役割の変遷

性役割は、社会から求められるものであり、時代や文化によって変化する(柏木, 1973)。日本において、男女に求められる特性を研究したのは、柏木(1967)である。柏木は、青年期にあたる人が認知している性役割を、身体的、知的、性格的、社会経済的領域に関する34項目を用いて、男性にとっての望ましさと、女性にとっての望ましさを評定させた。その結果、男性に求められる特性は、「女性をリードする」「指導力のある」「経済力のある」「意思強固な」「背が高い」などであり、女性に求められる特性は「気持ちが細やかな」「かわいい」「家庭的な」「容貌が美しい」「従順な」などであったとした。また、柏木(1972)は、前の研究の結果に基づいて、青年期における性役割の認知構造を再度分析し、男性の役割は「知性の因子」と「行動力の因子」で表わされ、女性の役割は「美・従順の因子」にまとめられることを報告した。

一方で、伊藤(1978)は、成人を対象に個人・社会・男性・女性の4つの評価次元において、性役割の評価にどのような違いがみられるかを検討する中で、男性役割や女性役割に関する反応語を集めた(表1-1)。そして、

それらが男性や女性にどれくらい重要かを尋ねた結果を分析したところ、3因子が抽出された。それらの因子は、男性に対する役割期待は「Masculinity」、女性に対する役割期待は「Feminity」、どちらにも望ましいとされた特性は社会的望ましきとして「Humanity」であった(表1)。また、この研究の中で、個人的評価においても、社会的評価においても、女性役割よりも男性役割の方が、はるかに高い価値が付与されていることを報告した。加えて、男性に対する役割期待は社会的望ましきと一致するが、女性に対する役割期待は社会的望ましきとは一致しないことも指摘した。

伊藤が作成した尺度は、社会における性役割期待やその望ましさを測定するために、M-H-Fスケールとして多くの研究で使用されてきた。伊藤からほぼ20年経過して、土肥(1995)が、M-H-Fスケールが有効であるかを検討したところ、土肥の研究の時点においても、M-H-Fスケールが社会にあるMasculinityやFeminityの様相を反映しており、M-H-Fスケールの項目はこの研究時にも有効であることを報告した。

湯川・清水・廣岡(2008)は、1970年代から1990年代までの間に、男性的性格特性・女性的性格特性とされてきた形容詞を用い

表1 伊藤(1978)により作成されたM-H-Fスケールの項目

Masculinity	Humanity	Feminity
冒険心に富んだ	忍耐強い	かわいい
たくましい	心の広い	優雅な
大胆な	頭のよい	色気のある
指導力のある	明るい	献身的な
信念を持った	暖かい	愛嬌のある
頼りがいのある	誠実な	言葉遣いのていねいな
行動力のある	健康な	繊細な
自己主張のできる	率直な	従順な
意志の強い	自分の生き方のある	静かな
決断力のある	視野の広い	おしゃれな

て、ジェンダー特性の変化を検討した。その結果、1970年代には、オールマイティな人間が男性としての望ましきであったが、1990年代には「強さ、指導力、経済力」があればよいと見なされるようになっていた。これに対して、女性では、1970年代にはあった「従順さ」や「依存性」「弱さ」といった弱さイメージが後退し、「美しさ」と「配慮」が現代女性の典型的なジェンダーであると認知されていることを明らかにした。この報告は、柏木（1967, 1972）とも類似しており、男性に求められる特性、女性に求められる特性は依然として存在するようにも捉えられる。

しかし湯川らはその研究の中で、そのような男女に求められる特性が示されると同時に、性別を直接に表現したり、男女のどちらかにしか使用されない男女を区別するような性格特性語は、1970年代から1990年代にかけて半減したことを報告した。また、それらの結果をうけて、現代においては、かつてより人間の性格特性を男女に区別しなくなっていることから、「ジェンダー（性役割）特性語」と称される言葉そのものが意味と機能を失いつつあるといえるかもしれない。

これらの報告からは、現代社会においては、性別に応じてふさわしいとされる性格特性は存在するものの、違いが小さくなってきており、明確に男女を区別しない傾向が強くなっていることが見てとれる。

### 3. 測定結果としての性役割

個人の性役割を表現するときに、男性にふさわしいとされる特性は男性性、女性にふさわしいとされる特性は女性性といわれる（心理学辞典、有斐閣）。男女が、生物学的性別のみで捉えられ、特性として捉えられていなかった20世紀の半ばまで、男性性、女性性は一次元で捉えられてきた（図1-1）。すな

わち、高い男性性は、必然的に女性性の低さを意味し、低い男性性は高い女性性を意味しており、男性性と女性性の中間に位置するのは、性別の混乱かアンビバレンスを意味すると捉えられてきた。

しかし、社会情勢の変化から、女性が男性のような役割を果たす中で、これまでの考え方では、個人では決して同時に備えることがないとされた男性性と女性性の両方を備えることが明らかにされ始め、それまでの生物学的性別に応じた性役割の一次元的な捉え方には限界が生じ始めた（Kelly & Worell, 1977）。

そこで、新たな性役割の捉え方を提唱したのがBem（1974）である。Bemは、男性性や女性性は、生物学的性に関わらず、別々の次元として個人の中で発達するという考え方を提案した。そして、両方の傾向をとともに示す特性を「両性具有性（androgyny）」として、個人の性役割タイプを男性性・女性性の2次元で捉えた。したがってそれらの高低の組み合わせから、個人のもつ性役割タイプを「両

男性性 ←————→ 女性性

図1-1 性役割の一次元モデル

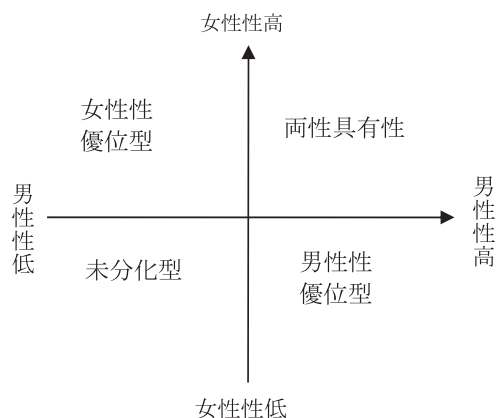


図1-2 性役割の二次元モデル

性具有型」「男性性優位型」「女性性優位型」「未分化型」の4つに分類した(図1-2)。

Bem は、この考え方に基づいて個人の持つ性役割を測定する尺度を開発した。その尺度は、性役割タイプを測定するために、男性にふさわしいとされる男性性項目20項目、女性にふさわしいとされる女性性項目20項目、男女共に望ましいとされる中性性項目20項目の計60項目からなる BSRI(Bem Sex Role Inventory)である。これは、後に、安達・上地・浅川(1985)によって日本語に翻訳され、ベム性役割目録として、性役割を測定する多くの研究で使用されてきた(表2)。

しかし、日本の社会における性役割に対する捉え方が、ベム性役割目録が日本に紹介された当初に較べて大きく変わってきた。日本では、1999年に男女共同参画社会基本法の施行や、改正男女雇用機会均等法の施行など、

男女平等な社会を実現するための法制度の整備も進められてきた。そのような社会の流れの中で、BSRIが、現代における男女の特性を測定する尺度としての妥当性を検討するいくつかの研究が行われた。

遠藤・橋本(1998)は、ベム性役割目録を用いて大学生の男性性・女性性を調査し、男性性の獲得に男女間で有意差がなかったことから、青年層における男性性に男女で差がなくなってきたと結論した。また、児玉・杉本・松田(2002)が、大学生の男性性・女性性を調査し、男性性のみでなく女性性においても、男女間に有意な差が見られないと報告した。児玉らは、遠藤・橋本と自身の研究結果から、現代においては、「男性性」「女性性」という呼び方がもはや現状にそぐわないと主張した。

個人の性役割認識を測定する BSRI は、生

表2 安達ら(1985)によって作成された BSRI 日本語版の項目

男性性	中性性	女性性
統率力のある	人情味のある	母性のある
積極的な	正直な	明るい
やる気のある	画一的な*	ちゃめっけのある
判断力のある	快活な	思いやりのある
自己主張のできる	地道な	純粋な
たくましい	おろかな*	人に尽くす
頼りがいのある	陰うつな*	女らしい
信念のある	おおらかな	繊細な
意志の強い	理解を示す	親切的な
力強い	協調性のない*	素直な
指導力のある	ふまじめな*	子どもをかわいがる
独立心のある	軽率な*	謙虚な
行動力のある	社会性のある	人に気を遣う
決断力のある	つまらない*	憤み深い
男らしい	不道德な*	しとやかな
自立した	心のせまい*	愛きょうのある
勇敢な	誠実な	やさしい
精神的に強い	怠惰な*	もの静かな
明確な態度の取れる	ユーモアのある	あたたかい
冒険心のある	誰に対しても平等な	従順な

注：中性性の\*は逆転項目を表わす。



物学的性別に関わらず、男性性や女性性は別々の次元として個人の中で発達するという考え方に基づいて開発された。そのため、性別によって男性性や女性性に差が見られることは前提としていない(下條, 1997)。しかし、Bemの尺度作成時には、男性は女性よりも男性性が有意に高くなり、女性は男性よりも女性性が有意に高くなるという結果が報告された。

### ストレス対処行動の性差と性役割認識の性差の関係

ストレス対処行動の性差と性役割の性差の関係を示すこれまでの研究を表3にまとめた。性役割期待は社会・文化に依存する部分が大きいため、日本における研究に絞って検討していく。

金・小川(1999)が、大学生を対象に、ス

トレス対処行動を測定するWCQを用いて、ストレス場面を設定してストレス対処行動の性差を検討した。そのWCQの結果を因子分析したところ、Endler & Parker(1990)と違って「問題解決」「自己制御」「ソーシャルサポートを求める」「願望的思考」「逃避・回避」「肯定的再評価」の6因子を抽出した。これらの因子のうち、「問題解決」「ソーシャルサポートを求める」「肯定的再評価」では、男性よりも女性が多く用いることを示した。

加藤(1999)は大学生を対象に、CISS日本語版(古川・鈴木・齊藤・濱中, 1993)を用いてストレス対処行動の性差を検討した。その結果、「課題志向」の対処行動において、男性が女性よりも有意に得点が高いという結果を得た。また、早瀬(2008)は、大学生を対象に同様にストレス対処行動の性差を調べ、男性に比べて女性が、「課題優先対処」、「情動優先対処」、「回避優先対処」のどれも

表3 ストレス対処行動と性役割の関係の先行研究

研究者	対処行動の男女差	性役割の性差	ストレス対処行動に果たす性特性の役割
Lazarus & Folkman (1980)	問題中心の対処 男 > 女 情動中心の対処 n.s.	検討なし	
Endler & Parker (1990)	課題優先対処 n.s. 情動優先対処 男 < 女 回避優先対処 男 < 女	検討なし	
加藤(1999) 加藤(2001)	課題優先対処 男 > 女 情動優先対処 n.s. 回避優先対処 n.s.	検討なし	男性性と女性性の両方を持っていることが、課題優先対処につながる。
金・小川(1999)	問題解決 男 < 女 自己制御 n.s. ソーシャルサポート 男 < 女 願望的思考 n.s. 逃避・回避 n.s. 肯定的再評価 男 < 女	男性性得点 男 > 女 女性性得点 n.s.	男性性得点が高いと「問題解決」「肯定的再評価」が多くなる。 女性性得点が高い「ソーシャルサポートを求める」が多くなる。
早瀬(2008)	問題中心の対処 男 < 女 情動中心の対処 男 < 女 回避中心の対処 男 < 女	男性性得点 n.s. 女性性得点 n.s.	男性性と女性性が共に高いことが問題中心の対処を高める。

多く行うことを明らかにした。

加藤(2001)や早瀬は、ストレス対処行動と性役割との関係を明らかにするために、CISSによってストレス対処行動を測定すると同時に、BSRI日本語版を用いて性役割を測定し、それらがストレス対処行動にどのように影響しているのかを検討してきた。加藤は、ストレス対処行動の性差と性役割を再検討し、ストレス対処行動には男女で性差が見られることを示したが、男性性・女性性における性差は検討しなかった。その一方で、男性性と女性性の両方の特性を持っている「両性具有性」群が、「課題優先対処」と「回避優先対処」を多く行うことを明らかにし、性役割タイプによって得意な対処行動が異なることを指摘した。また、早瀬は、ストレス対処行動の性差に加えて、男性性・女性性の性差を検討したが、男性性と女性性の得点には性差がなかった。そして、男性性と女性性の両方が高い両性具有性群が、「問題中心の対処」を多く行うことを示した。

金・小川は、ストレス対処行動に性差を見出した後、男女間で、男性性・女性性の得点を比較した結果、男性性については男性のほうが女性よりも得点が高いが、女性性では性差が見られないことを報告した。また、男女共に、男性性の得点が高くなるほど「問題解決」「肯定的再評価」の対処行動が多くなること、女性性の得点が高くなるほど、「ソーシャルサポートを求める」対処行動が多くなることを報告した。しかし、その一方で、男性性が高いことが、男性においては、「問題解決」の対処行動だけでなく、「逃避・回避」の対処行動を行わせることや、女性においては、男性性が高くなるほど「願望的な思考」の対処行動を行わないことを示した。また、女性性が高い場合には、男性では「ソーシャルサポートを求める」対処行動だけでなく、

「自己制御」「願望的な思考」「肯定的な再評価」と関連していることを明らかにした。

## 研究結果と生活実感とのずれ

以上をまとめると、ストレス対処行動では男女差があるにも関わらず、BSRIによる男性性、女性性には男女の差が明確に現れてこなかった。それに加えて、性役割特性と対処行動との関連についても、性別にかかわらず男性性が高いと、問題解決的な対処行動が多くなることが示唆されるが、それ以外に一貫した結果は得られなかった。

すなわち、ストレス対処行動に表れる性差が、性役割の影響であるならば、性役割にも男女差が見出されるはずである。また、性役割の測定においては、「男性性」「女性性」が生物学的性別に付随して現れる特性であれば、男性では男性性の得点が高くなり、女性では女性性の得点が高くなることが期待される。しかし、そのような結果が得られていない。すなわち、これまでの研究で主に使用されてきた性役割尺度である「BSRI」では、現代における性役割を測定できないのではないかという疑問が生じる。

前節に挙げたように、現代では男女平等が叫ばれる中で、人間の性格特性を男女で直接区別するようなことは少なくなっている。したがって、社会が男性や女性に求める特性を測定するBSRIでは、男女の差が明確に現れ難くなっているのではないかと考えられる。しかし、実生活の中では、性別によって期待される性役割行動が違っており、さらに、ストレス対処行動においても性差があるように思われる。性役割のどの側面を測定すると、現代における性役割を捉えることができるのであろうか。

山田(2002)は、大学生を対象に性役割観

を調査し、性役割の捉えを、雇用、福祉、教育、メディアという公的領域と、家庭という私的領域に分類することができることを指摘した。その上で、私的領域である家庭は、伝統的な性役割観を保持する再生産装置としての機能を持つことや、大学生の男女の性役割観の形成には家庭の影響力が強いことを示した。また、男女の平等の判断基準を研究した宇井(2002)は、職場などの公的領域においては性別によって役割を固定されることがなく、男女が等しく役割を担うことが平等の条件として求められる。しかし、私的領域である家庭においては、女性の特性を生かして、家事・育児をするなどといった男女の特性を生かしたあり方が、平等の条件として求められることを指摘した。このように使われる性に付随される特性は、性別に後天的に割り振られたものでありながら、家庭では、性別に *a priori* に備わったものとして扱われる傾向が強い。

また、伊藤(2001)は、ジェンダーフリーの叫ばれる現代において、公的には性差を意識することが少なくなってきたとした上で、それでもなお、危機的状況や困った事態に直面したときに、「こういうときは男、あるいは女でなければ」と考えることがあることを指摘した。そして、そのような状況を性差覚醒状況と呼び、その内容を検討した。その結果、男性は頼もしさ、女性は母性を求められる状況において、性差を強く意識すると報告した。

以上のことから考えると、性別に応じて明瞭に区別される事態にならないと、BSRIで扱われるような男女にふさわしい特性に、性別による差が見られなくなっているように思われる。一方で、山田や宇井の研究が指摘しているように、私的場面とされ、頼もしさや母性が最も求められる場面であると考

えられる家庭では、男女に区別された伝統的な役割がいまだに残っていると考えられる。そうであれば、家庭のような私的な場面では、男女にふさわしいとされる役割や行動があり、それらに基づけば、生物学的性別に適切であるとされる性役割を明らかにすることができると考えられる。

社会的不適応に見られる性差から、この問題を解決する手がかりとして性役割期待を取り上げて検討してきた。近年になって、公的場面での性役割期待が生物学的性別に依存しないことが明らかとなってきたので、これまで測定されてきた性役割では、社会的不適応の性差を説明できないことが明白である。一方で、私的場面での性役割期待は依然として実感される。その代表が家庭内における性役割行動である。社会的不適応に見られる性差の原因を性役割期待に関係づけて検討するには、家庭内のような私的場面に見られる性役割を取り上げて検討する必要があるように思われる。

## 引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司(1985). 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) —日本版BSRI作成の試み—, 日本教育心理学会総会発表論文集27 (0), 484-485. (尺度は、堀洋道・山本真理子・松井豊 (1994). 人間と社会を測る心理尺度ファイル, 垣内出版, pp. 30-34)
- Bem, S. L. (1974). The treatment of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42 (2), 155-162.
- 土肥伊都子(2007). 「性役割」, 中島義明(編), 心理学辞典, 有斐閣, pp. 504.
- 土肥伊都子(1995). ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ—母性・父性との因果分析を加えて—, 社会心理

- 学研究, 11 (2), 84-93.
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multidimensional Assessment of Coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58** (5), 844-845.
- 遠藤久美・橋本宰 (1998). 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について, *教育心理学研究*, **46** (1), 86-94.
- 福富護(2006). ジェンダー心理学, 海保博之(監) 朝倉心理学講座14, 朝倉書店.
- 古川壽亮・鈴木ありさ・齊藤由美・濱中淑彦 (1993). CISS(Coping Inventory for Stressful Situation) 日本語版の信頼性と妥当性: 対処行動の比較文化的研究への一寄与, *精神神経学雑誌*, **95**, 602-621.
- Gould, S. J. (1981). *The Mismeasure of Man*, New York: W. W. Norton. (鈴木善次・森脇靖子(訳) (1989). *人間の測りまちがい—差別の科学* 誌一, 河出書房新社.)
- 早瀬未紗 (2008). 青年期における性役割の認知がストレス対処行動に与える影響, 平成20年度岐阜大学教育学部卒業論文.
- 人見一彦 (2007). 臨床精神医学30年の経験, *近畿大学医学雑誌*, **31** (1), 1-7.
- 井上輝子 (1995). 日本の女性学と「性役割」, 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子(編) 日本のフェミニズム③性役割 岩波書店.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究, *教育心理学研究*, **26** (1), 1-11.
- 伊藤裕子 (2001). 性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプ, *心理学研究*, **72** (5), 443-449.
- 柏木恵子(1967). 青年期における性役割の認知, *教育心理学研究*, **15** (4), 1-11.
- 柏木恵子 (1972). 青年期における性役割の認知 II, *教育心理学研究*, **20** (1), 48-59.
- 柏木恵子 (1973). 現代青年心理学講座5 現代青年の性役割の習得, 金子書房, pp. 101-139.
- 加藤知可子 (1999). コーピングにおける性差 広島県立保健福祉短期大学紀要, **4** (1), 13-16.
- 加藤知可子(2001). 青年期におけるコーピング, 精神的健康に与える性役割の影響, *日本看護学会雑誌*, **24** (1), 57-66.
- 警察庁生活安全局 (2010). 平成21年年中における自殺の概要資料.
- Kelly, J. A., & Worell, J. (1977). New formulations of sex roles and androgyny: A critical review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **45**, 1101-1115.
- 金 愛慶・小川俊樹 (1997). コーピング行動の性差—性役割の観点から—, *筑波大学心理学研究*, **19**, 79-90.
- 児玉真樹子・杉本明子・松田文子 (2002). 現代の男女大学生の性格特性と性役割認知, *広島大学心理学研究*, **2**, 73-84.
- 小杉正太郎 (2002). ストレス心理学: 個人差のプロセスとコーピング, 川島書店.
- ラザルス, R. S. & フォルクマン, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer. (本宮 寛・春木 豊・織田正美(監訳) (2004). *ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究一*, 実務教育出版.)
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and social behavior*, **21**, 219-239.
- 間宮 武 (1979). 性差心理学, 金子書房.
- 小倉千加子 (1991). 性役割の発達, 東 清和・小倉千加子(編) 性差の発達心理, *現代心理学ブックス* 63, 大日本図書, pp. 155-202.
- 坂部弘之 (1992). ストレス研究の歴史の変遷, 労働基準調査会.
- 下條英子 (1997). ジェンダー・アイデンティティー社会心理学的測定と応用, 風間書房.
- 田邊敏明・堂野佐俊 (1999). 大学生におけるネガティブストレスタイプと対処行動の関連, *教育心理学研究*, **47** (2), 239-247.
- Tobach, E. (1973). *The four Horsemen : Racism, Sexism, Militarism, and Social Darwinism*. New York: Human Sciences Press. (本吉良治・岡本和子(訳) (1979). *科学の名による差別と偏見*, 新曜社.)

東京都青少年・治安対策本部 (2008). 平成19年度若者自立支援調査報告書.

宇井美代子 (2002). 女子大学生における男女平等を判断する基準—公的・私的・個人領域との関連から—, 青年心理学研究, **14**, 41-55.

山田礼子 (2002). 男女大学生に見られるジェンダー観の比較—家庭内でのジェンダー観形成過程に注目して—, 社会科学, **69**, 1-33.

湯川隆子・清水裕士・廣岡秀一 (2008). 大学生のジェンダー特性語認知の経年変化—テキスト・マイニングによる連想反応の探索的分析

から—, 奈良大学紀要, **36**, 131-150.

#### 付記

本論文は、早瀬（現今枝）未紗が岐阜大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。本論文に関する連絡は、〒501-2592 岐阜市太郎丸80 岐阜女子大学文化創造学部 大井修三宛てにお寄せください。

